

我が 228 の記

蘇 仲 卿

一、プロログ

星霜移り、人は去る。間もなくやってくる 228 事件 60 周年は、79 歳で迎えるが、私もやがて去り行く一人になる。60 年前の体験を書き残さねばと思う。

1946 年の春、旧暦正月の頃、私は生活の糧を得るために、創設間もない民報と言う新聞社の校正係としてアルバイト就職していた。本職は台北高校理科乙類の学生であり、大学入学をその歳の秋に控えていた。この職を得たのは、高校学寮七星寮の舎監であられた滝沢寿一先生が私を伴い、先輩であり且つ台湾社会に於ける有力者であった K 氏を訪れ、その K 氏の御紹介に預かったものである。

民報社は戦後台北で創刊されたと言うが、報紙の巻頭に掲げた題字は孫文の筆になるもので、中国革命時代に広東で発行された同名の新聞紙の後を継いだものと言う。管理職であられたのは、社長台湾大学文学院院长林茂生、総編集許乃昌(理甲の同窓許乃超君の長兄)、総主筆黄旺成、発行人兼総務吳春霖、営業林仏樹、採訪(外勤記者)駱水源(私の入社直接紹介人)の諸氏、みんな戦前から漢文新聞(例えば台湾新民報)に関わった老練な新聞人であった。

私が初入社した頃、編集部のオフィスは万華駅に近い普通民家の中にあっただが、私が大学に入った頃には、お成り街道(今の中山北路)に面した、双連(マカイ病院の付近)より北側にあった、オフィスと印刷工場一体の木造平屋の社屋に移っていた。此処には宿直室があり、夜勤の私は二時頃に最後のゲラ刷りを見終わったら其処で就寝し、朝自転車で中山北路を真っ直ぐ南に、水道町(今の羅斯福路四段)公館にある台大本部に到る道筋で登校するのを常としていた。

二、事件発生現場との出会い

夜勤の校正係は午後七時以降に出社すればよい。1947 年 2 月 27 日の夕方、私は円公園の屋台で、うまいものでも食べてから会社に出ようと思って、北門から太平町(今の延平北路)に入り、やがて円公園に向かって右折したとたんに、異様な光景が目映った。向かって左側にある蓬萊閣の門前あたりに、大型ジープが一台ひっくり返されて焼かれた残骸があったのである。円公園の屋台で発生した事件の経緯を聞いた後、全速力で会社にかけて私には、すぐ採訪部長にこの事を告げ、その夜記事として書き上げられた事件の内容を、誰よりも早く活字として読んだ。この闇タバコ取り締まりに発端した殺人事件は多く報道されているので、私が贅言するまでもないが、事件発生後間もなくその現場を訪れ、現場一帯に溢れていた目撃者の憤懣の熱気が異常なものであり、その

頃新聞で多く取り上げられていた社会不穏の気配を身近に強く感じ取ったと思う。然しながらこれが多くの悲情を生み、未だに完全にその傷痕が癒されていない、台湾近代史上の大事件に発展しようとは、些かの予感もなかった。

三、228

2月28日早朝、私はいつもの通り、自転車で学校に向かった。当時、昔の台北市庁舎を使っていた陳儀を長とする台湾省行政長官公署(今の行政院院址)にさしかかると、群集がその広場に集まりだしているのが見え、高いテラスの上には、銃を構えて見下ろしている憲兵の姿が見えた。やがて南門にさしかかったが、此处では専売局から事務机などが運び出され、南門と専売局の間の広場に積み重ねられて、燃え盛っていた。道の両側にまだ田圃が残っている古亭町あたりに来ると、後方の市内から銃声が響くようになる。市民が銃を持っているはずはないから、警察か軍隊が市民に向かって発砲していたに違いない。

学校は森閑として学生の姿はまばら、教師の影も無く、自然休校になっていたが、三、四十人位の学生が、福利社兼学生食堂(今の第一会議室)に集まり、遠く間歇的に響く銃声を聞きながら、大学生として何をすべきかの議論を戦わせていた。緊迫した情勢の中では、いつものような長論議になる事はなく、すぐ、皆おのおの自分の生活拠点に戻って、周りの情勢に即した行動をとるべきである、よって即時解散と言う事になった。

私には新聞づくりの手助けという仕事がある。それで、一応新聞社に戻る事にした。朝早く通った長官公署は群集がまだ居るだろうと思ったので、北門から太平町に入る道を選んだ。これは大変な見込み違いであった。新公園と大学病院の間の道から、博物館前の駅前大通りに入り、1945年5月30日の台北大爆撃で姿を消した元鉄道ホテルの前から左折して、北門に向かってすぐ、郵便本局と北門の間の路上に、銃撃にあって倒れている人がいるのが見えた。まだ間歇的に響く銃声は、郵便本局と相對している鉄道部から発していると見受けられた。

私は引返して梅屋敷(後に孫文が台湾に来たときの宿泊旅館として、孫文記念館となった)の横から建成町に入り、其処から双連を経て新聞社にたどりついたのである。

途中で大陸から来た所謂外省人が殴られて、奄奄一息の状態道端に倒れているのに何人か出くわした。なんとむごい事をするのかと目をそらさざるを得ない情景であった。後で聞けば、台湾語や日本語で問いかけ、返事が出来なければ殴られたものだそうである。うかつに同情心を示せばこちらも殴られる。殺気立って復讐心に燃えている民衆に理屈は通らない。官憲の相次ぐ無慈悲な発砲事件に端を発したこの事件で、無辜の外省人が犠牲になったのは事実であるが、始めは陳情と言う平和的な手段しか持たない民衆を、白日下において銃

撃する官憲のむごさ、そしてその後、平和解決の為の協商という名にかくれて、虚偽に満ちた民衆との談判交渉の後、突然全島を襲った弾圧と大量殺戮の非情残忍さが、未だに台湾人民をして、国民党政権は外来政権であると位置づけている所以であると思う。

四、協商と欺瞞

228事件の発端は専売法違反の闇タバコ取締りである。勿論 George H. Kerr 氏の著書”Formosa betrayed”に詳しく述べられている、大陸政権のあく事なき貪婪な略奪行為による、生活必需品の欠乏がもたらした社会的不安が主原因であるが、当時の台湾人民には、どうして台湾が戦後一年ぐらいの間に食料不足になり、物価が異常に高騰したのか解りようがない。然しながら、日本人が残した酒とタバコの専売制度は大陸にはなく、戦後大陸から多くの大陸「私製」タバコが大手を振って輸入され、広く売られているのに、台湾での「私製」タバコがご法度と言うのは了解に苦しむと言った不平は、一般民衆には理解できた。そして勿論、生活必須の米を含む食料価格の騰貴と、教師や公務人員の月給滞与についての苦情も。228直後の約一週間、台北市公会堂で、民衆を代表する台北市参議会代表を主なメンバーにした民間有力者と、官憲代表による事態打開の為の処理委員会と名づけられた会議が重ねられた。私は昼間は仕事がないので、よく公会堂に出かけて、その日その日の会議結果の告示を読み、又その夜には記者の書いた新聞記事として読んだ。それによれば、民衆の要求は正当であるとして官憲は概ね承認した。

その間、台北以外の全島各地ではどんな事が発生していたのだろうか。民衆の放送局占領で、各地から威勢のいいラジオ放送が聞こえたりしていたが、新聞紙のようなマスメディアでも、通常の通信機能がよく作動していたのではなく、おおむね外界と隔絶し、当地でかき集め得た新聞だけ（主に処理委員会に関する報道）を載せていたに過ぎない。その為に発行版面は大幅に縮小し、編集と印刷作業も短時間で終わる事になる。そしてその短縮された仕事も3月8日で終わりを告げる。

五、鎮圧と大虐殺の開始

3月8日の夜、縮小版の新聞紙印刷は普通より早く始まったが、真夜中近く、突然外から小銃と軽機関銃のけたたましい射撃音が飛び込んできた。私はすぐ印刷工場に走りこんで作業中止と消灯を印刷工に頼み、恐る恐る窓から頭を出して外を見ると、向かいの道のそばに構えられた軽機関銃が、間歇的に向こう前方に向かって火を吐いていないか。そして左手前方の遠くからは小銃の発射音が間隔を置いて聞こえてくる。その方向は明治橋(中山橋に改名)に当たり、後日判明したことだが、その晩多くの人針金で後ろ手に縛られ、銃殺の後基隆川に投げ込まれたと言う。淡水に漂着した死体でわかったとの事

である。後日明らかにされた圓山事件の学生犠牲者達であったのかと思われる。

社屋は、約1メートルの煉瓦造りの基礎の上に、木造の壁と屋根を乗せた粗末な造りである。私は印刷工にコンクリートの床の上に新聞紙を敷いて、寝るように建議した。うっかり流れ弾に当たったらそれこそ災難だと思ったのである。寝ると言っても、遠近ばらばらの方向から不規則に響いてくる銃声で、一人として夜明けまで寝込んだのは居ない。

この夜に始まった軍隊による制圧行動は、台湾全島に及び、およそ一週間続いたのではなかろうか。中南部では、学生などによる軍事基地の襲撃で武器を獲得し、軍隊との間に交戦があったところもあったと言うが、台北市では武器を手にし得た民衆は無かったと思う。死者何人と言うはっきりした統計も無いようである。この制圧行動で病院に担ぎ込まれた負傷者が滅多に話しに上らないのは、一方的な虐殺を裏付けていると思う。

3月9日の払暁、銃声は絶えていた。官憲に睨まれているに違いない民報社からは、一刻も早く脱出しなければならない。

此処で私が民報社で一緒に仕事をしてきた人たちのことに触れておく必要がある。

1946年の秋、大陸から台湾に戻り、台湾大学の法学部に、大陸の大学から「転入」の形で入学し、アルバイトとして民報社に私と同じく校正係に就職した先輩が一人いた。この人は台北二中四卒で台北高校文甲に入学、終戦の年に卒業した詹世平氏であるが、私の前に現れたときは、詹致遠と名乗っていた。私の兄と台北二中の同期生であったので、改名の事実が直ぐにわかった。彼は228事件の後大陸に戻り、1988年私が台湾の中央研究院代表として、北京で開催された国際会議に出席した折、会議主催の中国科学院の方に尋ねて貰ったところ、なんと呉克泰と改名し、中共の政治協商会議（政協）の常務委員になっていた。この人と机を並べて仕事をした合間に、大陸の事情をいろいろ教わったのであるが、その中で私のその後の生活態度にもっとも大きな影響を与えたのは、次のような教訓である：「若い人は血気盛んだから、世の中の政治不満に対し、正義感から革命的感情が沸き、えてして政治活動に首を突っ込みたがるが、現下の中国では政治活動は素人がやったら命を落としかねない。国共闘争の前途は定かでないが、どちらが勝ったにせよ、将来の中国建設には理農工医の人材が必要である。だから、君は絶対政治に関与するな」。私が大学卒業当時、政府が執り行った就職世話会で、国民党入党が出世の道に繋がるような暗示で誘われたが、簡単にNOの返事が出来たのは、この先輩の教訓を良く覚えていたからと言える。

この先輩は228事件発生後、新聞縮小で仕事が減ったせいも有って、出社する事が減り、何かを活動していたに違いないことは、後日思いがけないことでわかったが、それは後で述べることにする。

もう一人のアルバイト校正係は、同窓の陳朝明君である。私が就職して仕

事に大分なじんだ頃、彼もやりたいと言うので紹介し、丁度版面拡張の時期だったので直ぐ採用された。かくして 228 事件における新聞社からの脱出行を私と共にすることとなった。

3月8日の深夜、町中に銃声が響いたとき、民報社屋に居たのは、若い二人のアルバイト校正係(年寄り早く退社)と、最後まで誤字の修正を担当する活版組み立て責任者一人に、印刷工二人だけだったと覚えている。職務の上では私が一番高い位置にあったので、現場責任者の形になっていた。Kerr氏の著書に拠れば、彼は3月9日の朝マカイ病院の窓から、略奪と銃撃虐殺の惨劇を目撃しているから、私たちの経験時間帯と照合すると、払暁銃声が絶えた時に民報社を脱出したのは幸運だったと言える。後日会社解散にあたり、遣散費受領で入社した時、床に散乱した活字配置板に残された銃把の歴然とした痕をみて慄然とした記憶は、今でも生々しく思い出される。

民報の発刊は1947年3月8日を最後とするが、3月9日の最終ゲラ刷り校正作業をやったのは私と陳朝明君の二人である。新聞源の不足から版面の縮小になり、重要事項である編集作業締めくくりの最終ゲラ刷り校正が、年若い校正係長から若い我々にゆだねられるようになった。それゆえに私は民報の実質終焉に立ち会ったというべきであろうか。

民報社の社址は後日官方新聞中華日報に使われた。どういう経緯でそうなったかは私にはわからないが、民報社は林茂生社長と共に、228事件を境に永遠にこの世から消え去った。

民報社は、私が戦後最も生活の困難に陥っていた時、生活の糧と、中国言語実用鍛錬の場、及び社会に対する視野の開きを与えてくれた恩顧の会社である。その消滅は深甚なる影響を私に与えたが、その事は此处では述べない。

私は今でも事件前の正月に、一社員として社長宅で振舞ってもらったすき焼きと、若い者はどんどん食べなきゃと勧められた林社長の温顔が忘れられない。

六、民報社からの脱出

3月9日の払暁、私たちは社屋の裏口の木戸を開け、冷え込んでいる一面だだっ広い靄が立ち込めていた畑地に出、分散して行動することにした。陳朝明君と私が目指したのは、228事件発生地近くにある同窓黄際鍊君のお宅である。私たちは双連の通りに出、北署の傍から円公園を経て、黄際鍊君のお宅に達する道順をとった。一路誰に出会う事も無く平穩に行けたが、円公園に向かっている途中で、前方から自転車でやってくる一人の男が、右手に拳銃を構えているのが見えた。思わず亭子脚の柱に隠れた。拳銃の発射音と鋭い銃弾のレンガに激突する音が同時に聞こえたが、男は後ろを振り返り見もせず、一目散に通り返けていった。或いは北署にかけ戻ろうとしていた警察だったのかも知れない。黄際鍊君のお宅に辿り着いたときの蘇生の思いは深かった。

軍隊に占領された台北は、市の立つはずも無く、外を歩く人も無い全くの死寂に包まれた町であった。そういう状態で、黄君のお宅にかけた迷惑は大変なものであったと思う。戦時ならいざ知らず、突然やってきた事件とその後の急激な事態の悪化は、予め食料の備蓄を許すような条件ではなかった。其処に飛び込んだ臨時居候の食料負担は並々のものではなかった筈である。私は今でもそれを思い出すとき、心からの感謝の念を禁じえない。

大稻埕の町に人影が現れるのに四五日はかかった。申し訳ない穀つぶしの立場を出来るだけ早く脱却しなければと考え、私は歩行人が見え始めた時黄君のお宅を出た。当時家族は新莊に住んでいたのも、台北橋を通り、三重埔を経る以外の道は考えられなかった。太平町を横切り、永楽町（今の迪化街）に入ろうとした時、なんと思いがけない人に出会った。詹致遠さんである。彼も非常に驚いて私の近況を尋ね、新莊に帰ろうとしているのがわかると、台北橋の両端は憲兵が立哨しておるが、通るのに危険はない、然し絶対に寒いからと言ってポケットに手を突っ込むな、大手を振って歩け、そして、どうせ車は通っていないから、憲兵の視線から外れる橋桁の陰は避けろと注意してくれた。何かの偵察行動をしているので無ければこんなアドバイスが出来るはずは無い。やはりこの人は只ならぬ者であると感じた。この出会いが約半世紀後、北京で再会するまでの別れとなった。

以上が私の直接見た 228 のあらましである。台湾全島でどんな事があったのかは、今は台北の和平公園（昔の新公園）内にある 228 記念館に多くの資料が収蔵されているし、インターネットの検索でも資料を集める事が出来る。歴史家でもない私が、それら資料を紐解いて解説する余地など寸毫もない。然しながら、民報という当時の民間主力新聞社の、低級社員の立場で直接見た事象は、記録として残したいと思う・

以下事件と直接のかかわりは無いが、以上に述べた人物に関しての余談を記しておきたい。

七、エピログの一

私たち台北高校文科同窓に林榮勳君と戴伝李君が居る。林君は大変な活動家で、1949年には台湾大学学生会の会長をやっていた。学長溥斯年の信頼厚く、よく呼び出されて意見を聴かれたと言う。1949年国民党軍の大陸敗退、そして台湾への撤退の最中に、高雄港の棧橋の一つが完全に消滅した大爆発事件が発生した。その直後林榮勳君と戴伝李君が逮捕された。林君は直ぐ釈放されたが、戴君は凡そ一年牢屋に放り込まれた。戴君のお父さんは民報社に勤めておられたので、私も知っている大変実直な方である。戴君のお姉さんは、終戦後直ぐに台湾を襲った赤狩りに纏わった基隆中学事件で処刑された一人であり、めったに口を利かない戴君のお父さんには、重苦しくその悲情が、何時も心に纏わっていたのではなからうか。

1950年の秋、私は台湾大学農芸化学科生物化学教室の新米助教に就任した。学校にあてがわれた宿舎は一天荘と名づけられた独身寮である。古亭町(今の羅斯福路三段あたり)にあったこの寮から大学に通うには一号バスに乗る。当時の一号バスは台北駅に始発し、大学公館を終点としていた。そのバスの中で戴君に出会った。その時、声を潜めた戴君の話は次のごとくであった。

最近牢屋から出されたが、今日は学校に復学の申請に行く。復学しない自由もない。

林栄勳君は学長がその不在に気づき、官憲に掛け合っただけで直ぐ釈放されたが、自分は誰も助けてくれないので今迄ぶち込まれていた。(林君は卒業後、直ぐアメリカに留学。飛行場でアメリカ入国審査が終わるや、移民官の前で、こんなパスポートを持つのを恥じるとして、破り捨てたと言うエピソードが伝わっている。彼は英年にして癌でアメリカで早逝。)

詹致遠さんは228直後大陸に脱出、1948年に密命を帯びて再び台湾に戻り、その翌年の春、新婚の奥さん同伴で大陸に脱出と言う離れ業をやった。つまり大魚は早くから網を逃れて捕まることなく、その大魚に育まれた雑魚だけが、後日逮捕投獄の憂き目を見たのだと。

八、エピログの二

詹致遠さんが呉克泰に変身したことは先に述べた。私は1990年前後に三回公用で北京に行ったが、彼に其処で会ったのは後の二回である。一回目は三峡ダムの建設可否についての視察旅行中、無線電話なら視察船に通ずるかも知れないと奥さんに言われ、かけてみたが通じなかった。後の二回はご馳走してくれただけでなく、一度は丁度お嬢さんが入院中で、奥さんが病院の付き添いで不在だったお宅に案内してくれた。確かアジアオリンピック村の近所に建っているアパートビルの中の一戸であった。狭いながら本棚に満ちている書籍や家具調度も気品高く、インテリゲンチヤとしての生活を送っておられるとうなずけた。

李登輝総統の時代になり、彼も故郷台湾に幾たびか帰ってきた。最初の1997年の一回は奥さんご同伴で、私が車を運転して台北を巡り、また私の研究室にご案内した。最後の一回は亡くなられる二年前の2002年3月、228事件のウイトネスとして招かれ、お一人で来られた。お会いしたのは、奇しくも私が日本への旅から帰って来た日であった。国家科学委員会の囑託で国家型農業生物技術計画の総召集人(director)を務めていた私は、遺伝子組み換え作物の生物安全性検査に関する日本の制度と施設を視察する為に、視察団の引率者として一週間にわたる日本の旅にでた。旅を終えて丁度飛行場から家に帰着して五分も経たない時に掛かってきた電話は、近隣に住む王源先輩からであった。呉克泰さんが来ているが、会いたいと言っている、来ないかと。王源先輩は呉克泰さんとは台北二中の同窓であり、私とは蕉兵重機中隊の戦友、大学勤

務の先輩同僚、又同じ区画内の大学官舎の長年にわたる隣居でもある。その夜、王家に於ける話は広範囲にわたったが、その中で特に印象に残ったのは、中国は台湾問題を戦争で解決する事はないと明言されたことである。

このときの談話で、最近体調が良くないから、台湾で身体検査を受けたいとの希望を述べていた。それなら黄伯超先生にお願いして按配して貰うのが良いのではないかということになり、そのように事が運んだ。然し、検査で入院したのが、急性肺炎で病気入院になってしまい、そのためにアメリカに居られたお嬢さんが台湾に駆けつけ、彼をエスコートして北京に帰ったと言ういきさつは、私は新聞の報道で知った。北京の病院で医者にも見離されていたのが奇跡的に持ち直し、その後一年余り、口述による回顧録を著すことに励み、2004年3月北京で亡くなられた。

呉克泰さんは宜蘭の人である。1945年高校を卒業する半年前に大陸に渡った。卒業式に出ていないので、勿論直接卒業証書を授かっていない。その証書を高校の下川履信校長が上海に居た彼のもとに届けてくれたと、これは最後に会ったときに聞いた話である。この証書があったために、なんでも証書の中国社会で生き延びるのに役立ったのだという。彼が上海に渡れた理由は、私がインターネットで検索した口述自分史の中で明かにされている。当時日本政府が発した学徒動員令を逆に利用したのである。かねてから学習していた北京語の実力で、志願して上海にある日本軍部の法務部に勤務したのである。この志願の旨を下川校長に具申し、学校からの推薦で台湾から直接上海に渡った。そして半年後卒業の時期が到来し、校長からの便りがあったという。ところが、日本の綿密なる戸籍制度のお陰で、卒業通知と現地召集通知が殆ど同時に届き、徴兵検査を受けて合格判定、その時点から逃避行に入り、やがて終戦を迎えて日本官憲からの追求を免れた。

呉先輩が大陸に渡り延安に達したと一般に言われているが、先に私に明かし、自分史の中でも書いているのは、上海でいろいろ道を探っている間に終戦になり、延安に達するに至らなかった。1946年台湾に戻ったときは、身分を明かす事は無かったが、自分史では戦後まもなく上海で共産党に入党した経緯が書かれており、後日李登輝氏の共産党入党の紹介人役を務めたという新聞に書かれたことからしても、私にたれた教訓は、台湾を思い、中国を愛した一人の共産黨員としての見識に基づいたものと言ってよかろうと思う。

私が228事件の半世紀後、北京で再会の機縁を得た偶然についても述べておきたい。前に述べたように、私は私たちの北京訪問の世話をしてくれていた中国科学院の方に、詹致遠、又は詹世平の在り処を探して貰ったのだが、誰も知らない。ましてや詹さんご自身は北京を留守にして居ったので、台湾から初めて公用で来た学者として、新聞で書かれた私の消息を、揚子江の船上で知る由もない。ところが、中国科学院の若い人たちの集まりに、たまたま彼の息子さんが居合わせ、この尋ね人の話を聴いてそれは俺の親父だと。かくてはじめ

は絶望とみなされた尋ね人が見つかったのである。私が中国科学院の方から告げられて覚えている内容は、彼の自分史の中で述べているのと、おおむね合致している、ただ彼のアイデンティティを確かめた人の名前が私の全然知らない人になっているだけである。あるいは彼の息子さんの親しい友人か？

九、エピログの三

228 事件は 1940 年代の後半に始まった半世紀にわたる戒厳令統治のもとでは、口にすることさえ憚れ、ましてや研究がなされる筈もなかった。George H. Kerr の豊富な台湾体験に基づいた著作 *Formosa betrayed* (1965 出版) は勿論禁書であった。しかし私はこの本を 1976 年アメリカで sabbatical leave をとっていた時に読んだ。この本の中で描かれている 1947 年の台北で起こった事件の有様は、私の記憶を生々しく呼び起こし、それこそ一気に読み終えたと覚えている。

蔣経国氏が死に、李登輝氏が総統職を継ぎ、そして全民選挙で総統を続任し、文化の面に於ける規制が緩和されると、228 研究が熱い課題になった。私の手元に戴国輝、葉芸芸共著の *愛憎 2, 28* (台北遠流 1992 出版) がある。記録と口述にもとずいた歴史検証であるとしているが、Kerr 氏の著作には触れていない。戴氏の記述では 1983 年 Berkeley で研究生生活を送った事があったという。Berkeley はアジア関係の情報が豊富なところで、私が台湾禁書を多く読んだ場所である。そして Kerr 氏がハワイに移住される前まで研究活動をしていた地域でもある。その環境下で 228 研究者が Kerr 氏の著作との出会いが無かったとは不思議な気がする。或いは出会ったが取り上げなかったのか。尚又、Kerr 氏の本の中では、民報の社説を引用したり、その存在は鮮明であるが、戴氏の著作の中では当時の官方新聞紙の引用は目立つが、民報に言及した所は見えない。

私が 228 に関する体験を書き記す事になった動機は、台北高校一期先輩の蕭成美氏訳、川平朝清氏監修による George H. Kerr 著 “*Formosa betrayed*” の日本語訳「裏切られた台湾」の出版に端を発する。Kerr がどんな見識と経験を著作の基にしているかは訳書に詳しいので、此处では触れない。然しながら、228 事件の語り部として最適任者である事だけは、その経歴からして間違いない。

今年この翻訳本が発刊されると直ぐ台北高校理乙の同窓上井良夫君が贈ってくれた。それで日本語で昔英語で読んだ記憶をたどった。感動は昔のまま、そしてその感動が昔の記憶を呼び起こした。それに加えて、私の 228 体験は民報社とは切っても切れない繋がりがある。短命で終わった懐かしい民報社の存在を、書いて置かなければと思ったのである。私にこの動機を与えてくださった上井君のご親切に感謝したい。

付け加えになるが、日本語版の発刊で中国語版はないかと、Google search にかけてみた。(ちなみに、台湾で Kerr 氏の著作が翻訳出版されたのは 1997

年である。陳榮成譯：《被出賣的台灣》、前衛出版社）意外な発見があった。1992年に新版として再版の形で英語版の原本がインターネット上で無料公開されていたのである。再販の序言が載っていたので読んで見ると、林宗義先生の筆になるものであった。

林宗義先生も台北高校の先輩である。又、医学部に進学した私の同窓達が、畏敬の念を持って語る戦後の台大医学部精神科を築かれた教授であり、林茂生先生の令息であられる。林茂生先生とは旧知であり、台北高校で教鞭をとられた経歴もある Kerr 氏が著した、林茂生先生が受難された 228 事件を中心に、台湾の政治的受難を詳しく検証した本を、広く世の人に読んで貰いたい林宗義先生のお心は、この序言からでもよく判ると思う。

228 事件の最も苛酷にして醜悪な部分は、暴民鎮圧の名に隠れて、台湾がそれまで蓄積していた知識層を、それこそ一夜で根こそぎ抹消したことである。これら台湾の精鋭は巷の暴民であるはずも無く、政府転覆策画者でもない。それが例外なく自宅で逮捕され受難しているのだ。協商会議で時間稼ぎをしている間に、この様な酷い計画が練られ、援兵至るや即時実行に移したのである。此れほどメソディカルに多数のターゲットを定め、時至るや一斉に刺客を派遣し、暗殺を遂行した行為は、台湾人は自国民に非ずと統治者が表明したに等しい。

十、エピログの四

228 事件は台湾における住民の多くを、1945 年を移民年代の境とした二つの族群に分断した。半世紀にわたる大陸からの隔離で、「隔離は種の分化の始まり」の進化論原理どおり、台湾島内における族群の融和が進んだと思うが、案外そうでもないような事態が最近浮上している。私は気質的に出自による差別は大嫌いである。私は大学教師としての約半世紀の間、自分の研究室で出自の多々異なる 35 人の博士生、100 人以上の修士生、そして 200 人以上の学士生の世話に関わったが、全て同じ目で彼らを見守った。私には現在選挙の度に、族群分断の言論が出てくるのが悲しい。外来政権による圧制統治は二十年前に終わったのではないか。曾っての支配者は外来政権であり、政治権力の分配は不公平であったが、抑圧されたのは族群の差異を問わない多数の民衆であった。そして今の台湾には、海の向こうから新しい外来政権がやってこない限り、曾っての外来政権が復活する気遣いは無い。我々は全国の融和を図り、新しい外来政権がやってくるのを防がねばならぬ。歴史は歴史、現世は現世、現世の台湾は住みやすい自由と平等の社会はであらねばならない。228 事件は教訓としてのみ生きるべきであるという胸襟を持たねばならぬと思う。(2006 年 12 月 23 日脱稿)